



笑いは 横型社会の潤滑油

元気にいろんな世界で活躍できる人材養成を！

吉野 伊佐男 ◆吉本興業株式会社 代表取締役社長

森本 靖一郎 ◆理事長

河田 悌一 ◆学長

お笑いやバラエティー番組からシリアスな政治討論会、報道番組まで、吉本のお笑いタレントが大活躍です。東京進出も成功を収め、なにわ発のお笑いブームはどこまで広がるのでしょうか。関西大学OBでもある吉本興業社長の吉野伊佐男さんを囲み、笑いの文化と、笑いのパワーにも通じる「強い関西大学」について語り合ってもらいました。

◆笑いの芸能・文化を究める

河田 今日、大阪難波の吉本興業本社を森本理事長とともにお訪ねし、吉野社長に「笑いの世界」のことを伺いながら、吉本と同じ大阪の風土の中で成長してきた関西大学についても話し合いたいと思います。吉野社長には5月27日に挙行された商学部の創設100周年記念式典で、同じく商学部OBの桂三枝さんと対談をしていただきました。吉本は、今や大阪のお笑いにとどまらず、日本を代表する芸能を扱う企業。そのあたりの事業展開などからお聞かせください。

吉野 商学部100周年のイベントでは、大変感激しました。母校を離れて42年。新しいキャンパスにも学生時代のノスタルジーを感じ、うれしい時間を過ごしました。私は関大卒業後、吉本一筋で他は何も知りません。吉本は創立94年で、私はその半分に在籍していることとなります。もともと寄席の劇場経営に始まり、この50年はテレビとともに発展させてもらったのが、おおまかな歴史です。これからはメディアの世界も多様化が進み、放送と通信の融合が盛んに言われています。メディアが増えてきますので、芸人やタレントの活躍の場も、今後はさらに広がっていくでしょう。私が入社した当時は同業も多く、競争が大変でした。今では業界でかなりのポジションを占めています。おごらず堅実に、とはいえ積極的に、関西だけでなく東京から全国へ、さらには海外にも進出したいと思っています。

森本 吉本興業の強さは本物ですね。私も、「強い関西大学」をキャッチフレーズに大学改革に取り組んでおり、着々とその成果が上がっております。マスコミや世間から、「最近の関西大学は勢いがありますね」と評価されています。ところで、吉本さんには、うちの卒業生もたくさんお世話になっており、御社と関大の縁は大変深いですね。

吉野 現在、副社長も関西大学出身者です。おそらく関大が持っている気風が、吉本の社風にぴったりマッチするのではないのでしょうか。

◆笑いの学部を一緒に作りませんか

森本 吉本には芸能学校もありますし、関西大学と吉本興業が手を組んで、大阪の発展のために、また笑いの文化を育てるために、笑いの文化と文芸を学べる学部をつくってはどうかと考えているんですが。

吉野 もちろん大賛成です。できる限り協力させていただきます。実は東京のある大学では、すでに吉本から講師を出して授

業を行っています。昨今、笑いが人の免疫力を高めるという臨床例が出てきて、岡山の大学の先生は、がん患者さんを連れて、吉本の舞台を見に来られます。笑ったあとは免疫力がアップするのだそうです。笑いが持つ効能を、大学の教育で生かそうという動きが盛んになってきているのは、うれしいことです。

河田 関大でも桂文珍さんに15年間、そのあとは林家染丸さんに3年間、文学部で「日本伝統芸能史」の授業をお願いしています。昨年は、桂三枝さんにも授業を持ってもらいました。大阪の庶民の文化としての笑いを追究するとともに、笑いの持つ効能を検証することができればいいですね。実際、「日本笑い学会」を本学名誉教授の井上宏先生が設立され、それを社会学部の木村洋二先生が応援して、全国的な活動に広がっていますから。

森本 今、関大は非常にいい時期だと思います。学長が教育面で積極的ですし、法人がそれを完全にサポートしています。今までは「車の両輪」と言ってきましたが、今や完全に一体となって教育研究の向上に努力しています。吉本興業とも一体になって、ぜひ、新しい分野を切り開いていきたいですね。

吉野 うちの行政からも、いろんなお話をいただくのですが、行政の枠の中では思い切ったことができない部分があります。だからこそ、民間でやる意義は大きいと思います。

◆吉本も関大も「ファンを大事にする」戦略で

河田 関大では総合情報学部ができて以降に、新しい学部の創設はありませんでした。時代のニーズに応じた変革をしてゆかないといけないということで、来年4月、新しく「政策創造学部」がスタートします。この学部では、国際関係、政治、経済、経営戦略、法律、地域文化など多様な領域を横断的に学べます。関西の自治体や財界などの協力も得ながら、実践的な政策立案ができる人材養成の場になります。

工学部も1958年にできて48年。非常に大きくなった学部を、土戸工学部長はじめ工学部の先生方の努力で、ダイナミックに再編します。“しくみづくり”を学ぶ「システム理工学部」、”まちづくり”を学ぶ「環境都市工学部」、”ものづくり”を学ぶ「化学生命工学部」の3学部が誕生します。いい人材を輩出して、学生が関大に来てよかったと思えるように、多くのファンをつくっていききたい。こういう点は大学も企業も同じでしょうね。

吉野 吉本も、大勢のファンに支えてもらっている点は同じです。社長に就任してから改めて、ファンは大事にせなあかん、芸人さんやタレントさんも大事にせなあかん、マネジメントする社員も大事にせなあかと痛感しています。我々の世界は「人」で成り立っていますから、何らかの方法で社会に還元したいと考えています。

森本 大阪で、吉本が発展したのは訳があると思います。江戸文化では、笑いはご法度です。大阪は商人文化だから、笑い重視の社会。今も関西の笑いと、東京の笑いは違いがありますか。

吉野 笑いの何を本質とするか、境目が難しいのですが、テレビの世界のバラエティーなどにも進出させてもらっています。



吉野伊佐男(よしの いさお)
1942年大阪府生まれ。65年関西大学商学部卒業、吉本興業株式会社入社。広報室長、大阪制作本部ソフトクリエイティブ部長、取締役大阪本部長、常務取締役などを経て、2004年代表取締役副社長。05年1月代表取締役社長に就任。新しいメディア向けコンテンツの制作や人材育成を推進。

我々の世界は「人」で成り立っていますから、何らかの方法で社会に還元したいと考えています。

基本的なマインドが大阪の土壌で育った文化を持ち込んでいるわけで、東京の笑いとは大阪の笑いはほぼ一緒だと思います。上方落語と江戸落語では、少し語り口が違いますし、粋なところを狙う江戸、庶民生活を描く上方と、話のネタの違いはありますが、大きな差はありませんね。ちなみに吉本新喜劇は45年もやっているんですが、ストーリーはすべてハッピーエンド。永遠のマンネリでやっています(笑)。

森本 今、吉本の番組がなくなったら、日本は暗くなりますよ。わが国の繁栄にもものすごく貢献しておられるということです。吉野 ありがとうございます。うちのタレントは本当に、よう頑張ってくれています。

河田 最近では中国でも笑いの伝統が復活していますが、上海でも、事業を展開されているそうですね。

吉野 上海ではディスコをやっています。IT関係の会社を買収して始めたもので、繁盛していますよ。政治の問題はさておき、まずは文化の面で仲良くできればというわけです。

◆“笑い”の地位は急上昇中

森本 私は常々、笑いは「横型社会の潤滑油」と言っています。笑いは、精神的な解放をもたらしますからね。

河田 中国の明の末期に編纂された『笑府』という本が、日本では江戸時代に訳されています(岩波文庫『笑府—中国笑話集』)。これが江戸の小噺とか、落語のもとになりました。中国の場合は、笑いが非常に大事にされ、司馬遷の『史記』にも「滑稽列伝」というのがあります。外交の場において、宮廷において、笑いをとる人が必要で、いろいろな笑いを駆使して国と国の交渉に当たった。笑いの伝統が、おそらく東アジア社会、特に中国にはあった。それらが、日本にも伝わったと考えられます。

森本 しかし、その時分の笑いの人たちは、大変身分が低かったとされています。日本書紀に出てきますが、蘇我入鹿が殺さ

れた時、滑稽な仕草をする俳優(わざおき)、いわゆる芸人が入鹿の剣を預かります。それで入鹿は抵抗できずに殺された。それにしても、近年、芸人の地位は向上しました。「横型社会の潤滑油」という重要な役目を果たしておられるからでしょう。

吉野 私も同感です。芸人さんの地位の向上には、目を見張るものがあります。だからこそ自重が必要です。

河田 ところで、吉野さんの関大生時代は?

吉野 私は関大では、グリークラブ(男声合唱団)に所属していました。入学式のときに体育館で、グリークラブのメンバーが関大の学歌を歌ったのを聴いて、いたく感動して入部したんです。3年生まで、すごく熱心に活動していました。グリークラブは無伴奏の合唱団ですので、音を正確にとるにはメンタリティーを発揮しないと、なかなかアンサンブルがうまくいかない。心一つにして、一致団結して目標のために頑張ることを学びました。グリークラブは、当時はメンバーが100人以上いました。今は運動部を除いては100人ものクラブはないでしょう。

河田 グリークラブは現在、現役は十数名のようですね。でも、入学式、卒業式にはOBの方々が集まり、一緒に歌って熱心に応援してくださっています。

吉野 私は、けっこう授業もまじめに出ていたほうなんです。しかし、最近の関大生は、何となく元気がなくなった気がします。普通の優等生になってしまったというか…。昔は梅田境界でも、関大生はすぐに分かったものです。おもしろいやつは、関大によくおった(笑)。

森本 やっぱり、元気がないですか。私は、学生にもっと母校愛を持ってほしいと考えています。母校を愛することが、家族



河田悌一(かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。

いい人材を輩出して、学生が関大に来てよかったと思えるように、多くのファンをつくっていききたい。



森本靖一郎(もりもと せいいちろう)
1932年奈良県生まれ。関西大学文学部、法学部卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、大学と父母間に信頼の絆を作り上げた。飛鳥文化研究所の開設にも尽力。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、04年10月理事長に就任。「強い関西大学」を提唱している。

私は常々、笑いは「横型社会の潤滑油」と言っています。笑いは、精神的な解放をもたらしますからね。

を愛し、社会を愛し、人類を愛する精神につながりますね。母校愛が学園を活性化し、明るくしてくれます。母校愛のない人間は、家庭を愛することも、会社も社会も、人類を愛することもできないと思うのです。

河田 今の学生は、母校愛を持ちにくい。だから学生をまとめるアイデンティティーが必要ですね。そのためには、スポーツクラブや吉野さんが入っておられたグリークラブなどの文化・学術のクラブやサークル活動が活発にならないといけないと考えています。

森本 「スポーツに強い関西大学」を実現するための一環として、昨年10月から「関西大学アイスアリーナ」の建設を進めています。間もなく竣工の運びとなります。日本の大学では初めて、国際競技規格の通年型アイススケートリンクが完成するというので、全国的に注目されていますが、高橋大輔君、織田信成君に続く世界レベルの選手がここで育ってくれればと願っています。

吉野 まさに、「関大ルネッサンスをもう一度」というところですね。

◆大阪の地に根ざし、元気な庶民性のある関大

森本 「関大ルネッサンス」という言葉は昭和22(1947)年、学長に就任された岩崎卯一先生が学生たちに向けて行った演説「学生諸君に告ぐ」に登場します。このスローガンは、戦後における学園再建の指標となりました。

河田 それを私が借用して、もう一度「関大ルネッサンス」を、と呼びかけ、関大の活性化を提唱しているのです。

森本 学長は大学院教育を重視しようというお考えです。そうすれば学力も上がってきますからね。私は特色ある強い大学にするために、大学の将来構想の一つとして、シニア層を対象にした学部を設置などを真剣に考えています。

河田 高齢社会の到来で、アクティブシニアの方々を対象に、ニーズは非常に大きいと思います。若い学生諸君、現役の社会人の方々、そしてリタイアされた社会経験豊かなシニアの皆さんが三位一体になれば、まさに「関大ルネッサンス」到来です。

吉野 ものすごくいいことですね。団塊世代がもうすぐ企業社会を卒業しますが、彼らにキャンパスを開放するわけですね。

河田 その人たちの持っているノウハウを若い学生に伝えてもらえば、相乗効果で、お互いに活性化されます。先ほど、関大生の元気がなくなったと言われていましたが、今の学生は知識中心主義になっていると思います。この社会で、何がいいのか悪いのか、どう変えていったらいいのか、自分で考え、解決する活力がすこし乏しいのかもしれない。

新学部はもちろん、これからの大学は自分で考え、提案する力を備えた人材を育成する場にしないで。

吉野 シニア向けのさまざまな対策は、学校やNPO、地域などでも今後増えてくると思います。そういう場を設けるのは、我々企業人の責任でもあります。

森本 私は新しい学部をつくることによって、既存の学部を活性化したいと考えています。高槻駅前の新キャンパス構想も、骨格が固まりつつありますが、幼児教育から高等教育、そして社会人までの生涯一貫教育にも、社会のニーズがある限り、取り組みたい。私は“泥臭い学校”というか、“骨太の庶民的な学校”をつくりたいんです。

吉野 私も関大は、大阪の土地に根ざした、泥臭い庶民の文化を形成していく学校だと思っています。でもちょっと気になるのは、昔は新入社員を一目見ると、関大卒だとすぐに分かったのに、最近では当たらなくなった。

河田 昔は、関大へ入りたくて、あるいはこの学部へ、というものがあつた。今は、どうもそうじゃない、そのあたりの影響もあるのでしょうか。強い大学にすることで、個性豊かな、品格ある学生を育成していきたい。最後に、関大生にメッセージをお願いします。

吉野 私自身は吉本という企業に入って、一度も苦しいと思ったことはないんです。会社自体は苦しいことがありましたが、当時は入社したら一生を捧げるというような時代でしたしね。社長になって、インタビューを受けることが多くなりましたが、「ひと癖も、ふた癖もある芸人さんを使っている会社の社長が、意外に普通の人ですね」と驚かれるんです。

後輩の皆さんには、関大の建学の精神をもう一度思い返して、行動してほしいですね。私は、会社の経営理念を書いた手帳をいつも持ち歩いています。つねに理念に立ち返ることを習慣づけて行動するのと、何気なく行動するのでは全然違います。元気な庶民性のある、いいやつが集まりが関大生のDNAだと思っています。そういう精神を引き継いでもらって、元気にいろんな世界で活躍できる人になってほしいですね。

森本 関西大学の建学の精神は、学歌がそのまま表しています。学歌を歌って、関大生としての誇りを持って、勉学に励んでもらいたいものです。今日はありがとうございました。